

〔資料〕

# 一枚摺の世界 — その小釈の試み (6)

関口 静雄・岡本 夏奈・阿部 美香

〔解題〕「おふだ」について (4) — 釘念仏御札〈その三〉

日課念仏十万遍唱で名高い磐城の聖僧守一無能の教導を受けた洛東鹿ヶ谷法然院の学僧鶴阿宝洲（一七三七歿）が奥州津軽外ヶ浜の浄土宗始覚山本覚寺五世貞伝良船の行業を編じた『貞傳上人東域念佛利益傳』巻下に、

野州日光山寂光寺の主僧冥途に至り。念佛拔苦の告命を得られし事。正三老人の因果物語片假名本に記せられたり。今その本圖を左に附す。

として、『因果物語』の一節を引き、五輪念仏図を載せている。『因果物語』の抄文は『日光山釘拔念佛縁起写』（国会図書館蔵）にも付載されているが、元文二年（一七三七）刊『貞傳上人東域念佛利益傳』によって示すと次のようである。

文明年中野州日光山寂光寺ノ覺源上人俄カニ死ニ至リ冥府ニ閻王命シテ令ニ歴覽セシ地獄ヲ既ニ出シテ五輪ノ圖ヲ告ニ上人曰罪惡ノ衆生死到レ此時先ツ釘ニ一身支節ノ四十九所ニ其ノ苦不レ可言ヲ若シ男女ニ為メニ稱阿弥陀佛ノ名號四十九萬遍ヲ填ニ五輪塔中ノ圈ニ至誠ニ回向スレハ亡者離レテ苦必ス生ニ淨土ニ、若シ其善者ナレハ受テ此ノ功德ヲ増ニ長ニ善根ヲ超ニ生ス上品ニ上人還テ陽間ニ當テ此ノ事ヲ普ヲ救中衆生上乃チ授テ五輪念佛ノ圖ヲ上人蕪生シテ其ノ圖在リ于掌中ニ爾來諸人毎値ニ亡者ノ中陰ニ依テ此ノ圖ニ念佛追福スル者屢有ニト靈驗ニ云



(宮島コレクション蔵)

なお、『日光山釘拔念佛縁起写』『貞傳上人東域念佛利益傳』が引く『因果物語』の一文は管見では同書に見当たらない。片仮名十二行本『因果物語』（寛文元年（一六六一）刊）巻中によって当該記事を示すと以下のようである。

廿七 蘇生ノ僧四十九ノ釘ノ次第ヲ記事  
日光山寂光寺。寛永ノ比ヨリ。百五十年前ノ住持ハ。佐野何某兄弟也。此坊行證。欠コト無。勤學聞エ有テ殊勝第一ノ人也。或時頓死シテ冥途ノコトヲ記シテ。普愚蒙ヲ驚カス。彼記録ノ中ニ四十九ノ餅ヲ備。四十九院ヲ供養スル因縁。并ニ四十九ノ釘ノ次第ヲ載ラル。八寸釘十六本。一尺六寸釘六本。六寸釘十二本。残ハ皆五寸釘也。四十九日間。念佛四十九万返唱ヘバ。此釘ニ當スト書付テ有。日光山参詣ノ者ワ。祈望シテ拜見スルト也  
(古典文庫185冊『因果物語』「片假名本」昭和三十七年十二月)

鶴阿宝洲が『貞傳上人東域念佛利益傳』に載せた右の五輪念仏図は寂光寺の釘念仏を引き継いだ日光山常行堂が出している釘念仏札と図様に小異がある。常行堂の釘念仏札と請取は現在は機械印刷の紙札であるが、中川光熹師が「日光山寂光寺釘拔念仏とその伝播について」（『歴史と文化』十）

に紹介された寂光寺の版行とおぼしい釘念仏札・請取と図様に変化はないようなので、『貞傳上人東域念佛利益傳』所載の五輪念仏図は寂光寺で出された釘念仏札ではないように思われる。おそらく宝洲は『因果物語』の一文に、寂光寺の釘念仏の影響をうけて制作された他所寺院版行の五輪念仏図を添えたのであろう。

寂光寺の釘念仏の伝播影響については、右の中川師と宮島潤子氏「日光山寂光寺釘抜念仏信仰」(『石の比較文化誌』(平成十一年一月)国書刊行会所収)に詳細な調査報告がある。それによると釘念仏の影響は、野州各村はじめ奥州二本松・同相馬・上州・常州・下総・武州埼玉・江戸・相州・甲州・信州・越後・佐渡・紀州高野山・京・大坂・備後・播磨・出雲・因幡・筑前長崎の広範囲に及んでいたという。中川・宮島両氏の調査はおもに文献と石造物が中心であるが、以下に常行堂の釘念仏札・請取と寂光寺釘念仏の影響をうけて制作された紙札を二点紹介する。

※

①日光山寂光寺釘念仏札

日光山常行堂発行

機械印刷 三〇・二×一〇・二cm



(宮島コレクション蔵)

現在、日光山常行堂で②「釘抜念仏請取」と一揃で頒布されているもので、五輪塔に配された梵字は「南無阿彌陀佛」を表わし、上部両脇に「日光山寂光寺釘念仏／本願 覺源上人」と刻されている。この釘念仏札と請取の図様はおそらく覺源上人が梓行したものと基本的に変化はないものと思われる。輪王寺蔵『釘抜念仏縁起絵巻』とそれを模刻した木版『寂光寺釘抜念仏縁起』(宮島コレクション蔵)に閻魔王から授与された紙札を押し

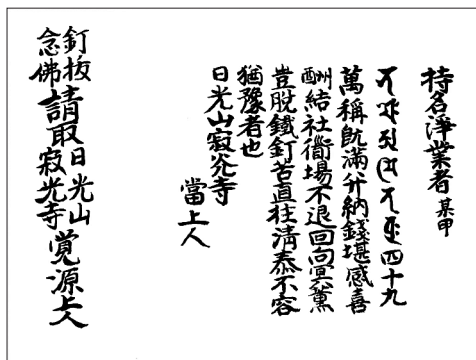
いただく覺源上人が描かれているが、その紙札は白紙に五輪塔が描線で描かれたものに見える。木版『寂光寺釘抜念仏縁起』に「かくて上人手をひき侍れば五りに四十九の釘のあなある札あり」「上人ゑんわうのさづけ給ひし札をうつしてあつさにきざみひろくほどこせり」と伝え、延宝四年(一六七〇)三月二十七日、寂光寺に詣りた増上寺の僧惠中は『日光山寂光寺釘念仏縁起聞書』(内閣文庫蔵)に、寂光寺上人覺源の坊号が龍泉坊であること、その龍泉坊が頓死したのは文明七年乙未十月二十日であり、閻魔王から授与された釘念仏札を左手に握って蘇生したこと、龍泉坊はみずから縁起を執筆し、それが二百余年後の今も寂光寺に所蔵されていること等々を伝え、覺源上人梓行という寂光寺の釘念仏札は「黒キ五輪ニ白キ釘六四十九アリ」と記しているから、龍泉坊覺源上人は釘念仏札を梓行するに際して五輪塔を墨一色にし、四十九の圈点を白抜きにしたのである。

②釘抜念仏請取

常行堂発行

機械印刷

一五・六×二〇・七cm



(宮島コレクション蔵)

『日光山寂光寺釘念仏縁起聞書』は、閻魔王は龍泉坊覺源上人に、「末世ノ衆生暴惡ニシテ冥途ノ苦患ヲ不レ辨死後四十九日ガ間骨節ニ四十九本ノ釘ヲ被レ打事ヲ不レ知」「此苦ミ勝レテ難レ堪也然ルニ至心ニ念佛四十九萬遍

ヲ満テ人ハ此ノ釘ノ苦ミヲ免ルヘキ也」と教誡し紙札を授けたのだと伝え、木版『寂光寺釘抜念佛縁起』は「いはんやいけるうちこのふだをうけみづから四十九万べんの念仏をしゆするとながらもはわうじやうたがひなし」と勸化の一文を加えている。いづれにしても念仏一万遍を唱し終るごとに五輪図中の白い釘穴を墨で埋めてゆき、四十九万遍唱を完遂すれば釘穴も埋め尽くされる。延宝四年（一六七六）に寂光寺を詣した増上寺恵中の見聞を要約すれば、

「終に四十九万遍唱を満てて釘穴を悉く消し終わつたら、その札の端に戒名を書き付け、これに少分の施物を添えて寂光寺に返納するのである。すると寺ではその札を本尊の左右に納め、過去帳にその戒名を載せて永く回向するのであるが、念仏道場としての寂光寺においては回向が永代に退転しない旨を証するために請文を出している。また念佛札を追善逆修のために返納するのであればその戒名を記しておくのである。」

という。なお、恵中の寂光寺参詣からおよそ一六〇年後の天保八年（一八三七）に刊行された植田孟縉編『日光山志』巻三「常念佛堂」項に「本尊三聖阿彌陀は、恵心僧都の作なり。此堂より釘念佛の札を出す。此事は覺源上人の開基にて、縁起にくはし。又此堂の前に、釘念佛を修したる札を納むるもの、石にて函の如く造れり」とあって、請取についての記述はない。退転したものかと思われる。請取はおそらく次のように訓むのであろう。

持名淨業者 某甲

南無阿彌陀佛四十九萬稱既に満ち、并せて納錢感喜に堪へたり。

結社道場不退の回向は冥薫に酬ひ、豈に鐵釘の苦を脱し、

直ちに清泰に往かむこと、猶豫を容れざる者なり。

日光山寂光寺 當上人

釘抜請取 日光山 覺源上人  
念佛請取 寂光寺

③ 所歸命阿弥印施五輪念佛圖 版行所不明 木版 二五・〇×一九・四cm

鶴阿宝洲『貞傳上人東域念佛利益傳』に載る五輪念佛圖にもっとも近似した図様であるが、表記の字体、「印施」の有無、また釘穴の大きさ等に微妙な相違がある。紙面中央に梵字「南無阿彌陀佛」を配した五輪塔を描

き、上部中央に「南無阿彌陀佛」、その両脇に「五輪念佛／拔苦與樂」、下部に「所歸命阿弥印施之」とあり、紙面両端に釘念佛の略縁起が記されている。



(宮島コレクション蔵)

(右) 文明年中野州日光山寂光寺覺源上人俄<sup>カニ</sup>死<sup>シテ</sup>至<sup>ル</sup>于冥府<sup>ニ</sup>閻王命<sup>シテ</sup>令<sup>ニ</sup>歴覽<sup>セ</sup>之

／地獄<sup>ニ</sup>既<sup>ニ</sup>出<sup>テ</sup>而<sup>シテ</sup>五輪<sup>ノ</sup>圖<sup>ヲ</sup>告<sup>テ</sup>上<sup>人</sup>曰<sup>ク</sup>罪惡<sup>ノ</sup>衆生<sup>死</sup>到<sup>レ</sup>此<sup>ニ</sup>時<sup>先</sup>釘<sup>ニ</sup>一<sup>身</sup>

支<sup>節</sup>四<sup>十</sup>九<sup>所</sup>其<sup>苦</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>言<sup>若</sup>有<sup>ニ</sup>男<sup>女</sup>為<sup>メ</sup>稱<sup>ニ</sup>阿彌陀佛<sup>名</sup>號<sup>四十九萬遍</sup>

一<sup>身</sup>填<sup>ニ</sup>五輪<sup>ノ</sup>塔<sup>ヲ</sup>

(左) 中<sup>ノ</sup>圈<sup>ニ</sup>至<sup>誠</sup>回<sup>向</sup>ス<sup>レバ</sup>亡<sup>者</sup>離<sup>レ</sup>苦<sup>ヲ</sup>必<sup>ス</sup>生<sup>ニ</sup>淨<sup>土</sup>若<sup>シ</sup>其<sup>レ</sup>善<sup>者</sup>受<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>功<sup>徳</sup>增<sup>ニ</sup>長

善<sup>根</sup>超<sup>ニ</sup>生<sup>ノ</sup>上<sup>品</sup>上<sup>人</sup>還<sup>ニ</sup>陽<sup>間</sup>當<sup>ニ</sup>證<sup>ス</sup>此<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>普<sup>ク</sup>救<sup>フ</sup>衆<sup>生</sup>乃<sup>チ</sup>授<sup>ク</sup>五輪<sup>ノ</sup>念

佛<sup>ノ</sup>圖<sup>ヲ</sup>上<sup>人</sup>獲<sup>シ</sup>生<sup>シ</sup>其<sup>レ</sup>圖<sup>ヲ</sup>在<sup>ニ</sup>于<sup>掌</sup>中<sup>ニ</sup>爾<sup>リ</sup>來<sup>テ</sup>諸<sup>人</sup>每<sup>レ</sup>值<sup>ニ</sup>七<sup>者</sup>中<sup>陰</sup>依<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>圖<sup>ニ</sup>

念佛<sup>ヲ</sup>追<sup>テ</sup>福<sup>ス</sup>者<sup>屢</sup>有<sup>ニ</sup>靈<sup>驗</sup>云

④ 辛未年何某印施五輪念佛圖 版行所不明 木版 二四・七×一六・九cm

紙面中央上部に弥陀来迎図を描き、その下に梵字「南無阿彌陀佛」を配した五輪塔を描き、塔上部両脇に「五輪念佛／拔苦與樂」、下部に「何某印施之」とあり、紙面両端に釘念佛の略縁起が記されている。覺源上人の頓死を三百年以前という辛未年は文化八年（一八一二）であるから、その

ころにも釘念佛信仰の弘通を計る動勢が存したのである。浜松市三ヶ日町の真言宗の古刹瑠璃山大福寺でも江戸中期以降弥陀来迎図を配した五輪念佛図を出していたが、当寺はその記憶をまったく失っているようである。



(宮島コレクション蔵)

(右) 三百年以前聖州日光山寂光寺覺源上人とんしてめいどうへゆきゑんま／王ことくくぢごくを見せ給ふ此圖をいだして上人にもふされざい人死して此所へくるなり身のふし／四十九処へ釘をうちくるシミたへがたしゆへに人の為／中陰／四十九日の間一日二万べんツ、南無阿弥陀仏をとなへ○をし四十九万べんを

(左) 万事多こうすればもふじやくるしみをのがれごとくへ往生することうたがいなし／又せん人なれば上品上生へうまるべしと上人きいて此圖をうけてよみがへり／して此事をかたられたといふこと傳記にあるゆへに此圖をほどこし精霊／をすく／はんがためなり 辛未の季

※

文明七年十月二十日、日光山の別所寂光寺の龍泉坊覺源は頓死して閻王宮に至ったが、長年月の浄業ゆえに閻王よりさまさま教誡を受け、衆生勸化を命じられて七日後に蘇生した。覺源が垂示された閻王の教誡を木版『寂光寺釘念佛縁起』によって記せば大凡次のようなことであった。

「人間は死んでのち四十九日の間、その身に四十九本の釘を打たれるのである。罪業の浅深によって釘の長短も異なる。それは喩えようのない苦しみであるが、自業自得の報いなので十王の方便によっても救いがたいのだ。娑婆において仏を供養し僧に布施する功德によってその苦しみを滅することができるが、しかし三十三年が過ぎなければ釘は抜けない。人が死んで四十九日が過ぎた日に白餅を四十九供えるのは、四十九の節々を転じて釘をこの餅に打たせよとの計らいで、四十九本の卒塔婆を立てるのはそれを仏体に擬えようという功德なのだ。たとえ亡魂が悪趣に墮ちようとも追福作善の功德によって釘の苦しみをまぬがれ都率の内院に往生することができる。その最善の方法は念仏を四十九万遍唱えることだ。追善のためばかりでなく、釘念仏札を受け、自身生前から四十九万遍念仏を修するものは往生すること疑いないのだ。」

死者追善のために塔婆を立てることはわが国の仏教的習俗として広く定着している。塔婆立てほどではないが、七七忌に四十九個の白餅を供えることも、四十九餅・傘餅・骨餅などと称する習俗がそれぞれの因縁・由来をともなつて今も各地に伝えられている。南峯乞士不可停はその『福田殖種纂要』（貞享三年（一六八六）刊）巻十「引導葬送或門、葬送中陰等之事」に、「變都婆功德無盡」として各種忌日に塔婆立てをする意義を説き、四十九餅について「表人間、四十八、大骨五躰五輪也」といい、「四十九餅外、四大餅」は「人間、禿也又礎也」と説いている。不可停は「四十九餅、大事別有相傳」として詳述を避けているが、しかし『福田殖種纂要』の記事は七七忌に四十九個の白餅を供えること、その餅はすなわち人間の身体を表するものであるという考え方が、貞享年間にはすでに民間に定着していたことを証している。

いわゆる六道絵にはしばしば釘苦を受ける亡者の傍らに四十九餅が描かれていて、それは地獄変相の定型の図柄といつてよい。器にはたくさんの小餅が描かれていることが多いが、それは追善のために遺族が亡者の身体に見立てた餅に四十九本の釘を打ち込みおき、一日一万遍の念仏を唱え終わるごとに釘を一本抜いてゆく。これを四十九日間続けければ冥土で亡者が鬼卒に打ち込まれた四十九本の釘がすべて抜けることになり、亡者は釘苦

を脱して往生することができると絵解きされたのである。

滋賀県高島市の真言宗智山派宝幢院薬師寺所蔵『地藏十王図』二十一幅は小野篁筆の伝承を有する室町時代後期の作品で、その第七幅太山王には画面向かって左に鬼卒に釘を打たれる亡者が描かれ、塔婆を挟んで右に鬼卒が四枚重ねの大餅に釘を打つ場面が描かれている。釘苦と同場面に四十九餅によるその救済法が示されていると理解することができる。そう考えると、たとえば奈良国立博物館蔵『矢田地蔵毎月日記絵』（二巻、室町時代）には十一月十九日の項に釘苦を受ける亡者とその傍らに地藏菩薩が描かれ、「くきねんふつのゑんきなり」の一文が添えられているが、ここでは釘苦の亡者を救うのはいうまでもなく地藏菩薩である。輪王寺蔵『釘抜念仏縁



「熊野観心十界曼荼羅」(兵庫県立博物館蔵)  
小栗栖健治氏『熊野観心十界曼荼羅』(2011年2月、岩田書院)  
より転載。



木版「寂光寺釘抜念佛縁起」(宮島コレクション蔵)

起絵巻」・木版『寂光寺釘抜念佛縁起』においては亡者釘苦の場面に亡者の傍らに閻魔王から授与された釘抜念仏札を押しただく覚源上人が描かれている。その光景は亡者の救済者が覚源ではなく、覚源が捧げ持つ釘念仏札であることを明瞭に示している。

七七日の満中陰に四十九餅を供える風習は釘念仏がその創始であると寂光寺釘念仏の縁起諸本は伝えるが、増上寺恵中が「世に四十九ノ餅ヲ用。來々是ヨリ始ルト也餅ノ義既ニ日本一弼ニ弘レリ念佛ノ義何ソ不弘哉」というように、延宝四年(一六七六)の時点において釘念仏は四十九餅ほどの広がりを持っていたのは確かである。

※

恵中はまた、「或僧ノ云、大原ノ融通念佛坂本ノ断抹磨念佛日光ノ釘念佛ト云テ我朝三品ノ念佛タリト也」と記し、「本朝三品念佛縁起」として「融通念佛之縁起・日光山寂光寺釘念佛之縁起聞書・断抹磨念佛縁起聞書」を一書にまとめている。これを大田蜀山人は「一話一言」巻九に「本朝三品念佛縁起抄」の項目下に採録している。そのうち現今ほとんど話題にされることのない断抹磨念佛について触れておきたい。

#### 断抹磨念佛縁起聞書

断抹磨ノ符ハ恵心ヨリ起レリ断抹磨ハ梵語此ニハ死苦ト翻ス略中恵心ノ僧都憐之行ヲ做シテ符ヲ出シ玉ヘリ畧中此ヲ以符ハ本ト不動ノ法火界ノ咒ヲ以修スルトナリ此符ヲ頸ニカケ一日ニ一万返ツ、百日ニ百万返ノ念佛ヲ唱終リ後來死病ノ時ニ吞之也(「一話一言」集成館蔵版、一八八三年)

右は略々縁起あるいは最略縁起とも称すべき一文であるが、断抹磨念佛の資料として貴重なものである。抹磨は梵語マルマン(marman)の音写で支節・死穴と訳される。人間の体の中にある特殊の支節で、何かがこれに触れると激しい痛みを起こして死ぬといわれる。支節・死穴に触れて命を絶つこと、転じて人間が死ぬときの最後の苦しみ、死苦をいう。この臨命終時の苦しみから逃れ、延命を望むための方便の一つが断抹磨念佛であるが、それは叡山の恵心僧都源信の創始であるという。その意を推すると、恵心は不動法火界呪を誦して加持した符を病人の頸にかけ、念仏を一日に

一万返ずつ百日にわたって百万返を唱え終わり、いよいよ病没する際にこの符を吞ませたというのである。

不動法火界呪の威力は断抹磨以外にも發揮されている。『今昔物語集』巻十六「隱形男依六角堂觀音助顯身語三十二」には、京に住む年若い青侍が大晦日の夜、一条堀川の橋で出会った百鬼夜行に唾を吐きかけられて姿を隠されたが、六角堂の觀音に祈念し、祈禱僧の行ずる不動明王の火界呪によって元の身に戻った話が載っており、また『是害房絵巻』には唐から渡朝した大天狗の是害房が叡山の余慶律師が行じた不動法火界呪の鉄火輪によって退散させられている。不動法火界呪の威力は強大であって種々の靈驗譚を生んでいる。

また近世には不動明王は断末魔の苦しみを除いてくれる仏尊としても広く衆庶に信じられていたのであって、たとえば栃木県芳賀町沼能家蔵の『念仏和讃集』（『念仏和讃御詠歌集』所収。平成十一年三月、芳賀町）に載る「ふどうみよをりやくわさん」の一節に、

なかにもふどうの　かんまんじ　いんがはほんらい　ふにのもん  
とんせうぼだいの　しごくにて　いつさいべうどう　りやくせん  
このりんじゆに　およんでは　だんまつまの　くげんとて  
みももきこへず　めもみえず　したねすくねて　ものいへず  
かかんなやみを　のがるるに　このそんはいする　ほかはなし

と不動明王の抹磨脱苦の靈驗が謳われている。右の『念仏和讃集』は沼能家歴代が詠唱した和讃・御詠歌など七十九首を収めたもので、特種なものではなく衆庶の日常における宗教信仰のありさまをよく伝えている。

なお、天台また真言密教においては臨命終時の死苦を脱するための修法は種々に行ぜられてきたのであって、いわゆる「諸大事」として師資相承される修法の中には「不動断末魔法」「断末魔之大事」等々の加持祈禱法が含まれており、如法真言律の無双の学僧と称された河南地藏寺の惟寶蓮體（一六六三〜一七二六）の著作にも『除断末魔苦作法』があつて、斯界において常に効験の確かな修法が需められていたことが知られる。また佐渡の弾誓流木食聖たちにも「断抹磨秘法」が師資相承されていたことを宮島

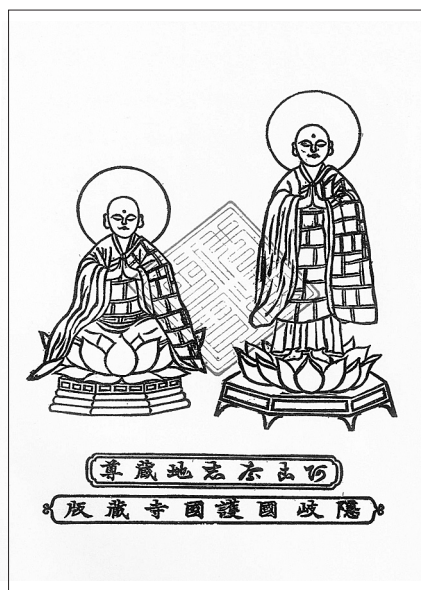
潤子氏が前掲論文で指摘しておられる。ついで断抹磨念仏を木食が修した一例を挙げておく。鞍馬寺における融通念仏会の再興に貢献した希代の念仏者として知られる中川常宇がその師である木食澄禪（一六五五〜一七二二）の行業を編じた『澄禪和尚行狀記』中巻に次のような記事がある。柴田六五郎氏編『復澄禪和尚行狀記』上中下（昭和五十七年十一月、南無山房）所載の影印によって示す。

師吉水の清き流れに浴し給ひ。一生色欲の汚れなく。梵行潔くして。断末磨の符珠の法を。行ひ給ふ事二度。かの度毎に。二千顆の珠を。加持したまふに。其符珠器中に忽然として悉く飛搖し。右に遶り還。左りにめぐり。終に空中に凝りて。昭然として順逆中の三道法を成じ給へる。靈驗顯なりし。その靈符を拜服し。正念往生を遂し輩。記するに違あらず。上來あまたの中に。近き比現證の人をいはゞ。勢州白子江嶋小川氏の母尼安貞。享保三年の秋。師の断末磨の符珠を拜服し。一七日を期して。如法に百万遍念仏を勤行ひし。第五の日没の比。忽然として西の空より。その圍三尺計の金色の蓮華。尼の目前に顯現に飛來するを見て。驚喜雨涙し。暫時の程。身を地に投じて拝き。頭をあぐれば。いつしかあとなくなりぬ。又第六七日兩日の夜。寂としてうし三つの比。念佛を勤し時。其屋上にありて。数多の人とおぼしき。誦經の聲相和して。妙なるを聞に。をのづから心もすみわたりて。身の毛もよだち。仰で信を催しき。

右の記事から、弾誓流の木食行を曳き、弾誓の開いた古知合阿弥陀寺を終焉の地とした木食澄禪が修した断抹磨念仏が如法の百万遍念仏であり、恵心以来の符を用いたものであったことが知られて興味深い。

（関口静雄）

## 17. 腮無地藏



阿古奈志地藏尊御影  
木版墨摺 25.6×18.2 cm  
(竹皇堂藏)

右は隠岐国護国寺蔵版の腮無地藏（島根県隠岐郡隠岐の島町上西）の御影札である。曹洞宗瑞麟山護国寺は今も島根県隠岐郡隠岐の島町原田に所在する曹洞宗の古刹で、隠岐守護佐々木氏の菩提寺である。文保元年（一一七一）、当時の大守佐々木清秀が祖先の追福を祈願し、三光国濟禪師（別名孤峰覚明禪師）によって建立されたものと伝えられる<sup>1</sup>。小野篁の彫像と伝える二尊を祀る腮無地藏堂は説経所にもなっている<sup>2</sup>。

小野篁は承和五年（八三八）十二月、遣唐使船への乗船拒否と遣唐使事業を風刺する詩「西道謡」を作ったことで官位を剥奪されて隠岐国に流罪となり、承和七年（八四〇）二月十四日に召し返された。隠岐における篁の動向は「島前海士町豊田の海岸に流れ着くと金光寺山金光寺（隠岐郡海士町海士）に籠り、翌六年明屋海岸から海を渡って光山寺（隠岐の島町那久）に身を寄せた。光山寺から願満寺（隠岐の島町小路）へ仁王門の仏像彫刻のため日参するうち、都万目の里（隠岐の島町上西）の向田家に宿を借り

た」と伝わる<sup>3</sup>。この向田家については腮無地藏堂内に掲げられた「腮無地藏略縁起」<sup>4</sup>は、「向田家の娘阿古那が常に歯痛にて腮が落ちるほど苦しんでいると聞いた篁がこれを憐れに思い、歯痛平癒の祈願を込めて地藏菩薩像を彫刻した。阿古那が朝夕一心に歯痛快癒を祈ると平癒した。阿古那は大いに喜び、篁が向田家を訪問するたびに懇ろに茶を汲み、名物の蕎麦を進上するなどして労った。阿古那は評判の美女で、村一番の器量の持ち主だった。篁は阿古那と語り合うのを楽しみに向田家に足繁く通い、二人は結ばれて子も生まれたが、その子は二歳で亡くなった。やがて篁が帰京することとなり、別れを惜しんだ篁は、子を象った木像を彫刻し阿古那に授けた。この篁彫刻の二体の木像が腮無地藏堂の本尊である」と伝えられている。腮無地藏の由来伝承は他にもあって、「立像は篁自身、座像は阿古那」とするものや、「阿古那の母親が総齒患という病に罹り、その看病のため篁の給仕に出られないことがあり、篁はその親孝行に感心し、二体の仏像を刻んで阿古那に与えた。阿古那が一心不乱に仏像に祈願すると、まもなく母親の病気は全快した。後にこの母親が亡くなるときに、へ祠を建てて祀れば、首から上の病気はなんでも治そう」と遺言した。阿古那は遺言通りに小祠を建て、そこに亡き母の霊と篁から贈られた仏像二体を腮無地藏として祀った」などと伝えられている。

明治二年（一八六九）、廃仏毀釈の影響を受けて腮無地藏堂にも火が放たれたが、近くに住む井上角四郎が火中に飛び込み、本尊を水に投げ込んだことで焼失を免れた。その後、井上家に保管されていたが、後年、地元住民によって地藏堂が再建され、本尊は二体揃って安置された。井上家は現在も地藏堂を管理し、腮無地藏を大切に祀っている。角四郎の末裔井上定彦氏の直話によると、地藏堂所蔵の「昭和十年旧五月二十四日」と記された墨書木札は改修時のものとのことなので、堂の再建は明治中期から大正初期のことであるらしい。

地藏堂の二尊は向かって右に立像、左に座像が安置されている。ともに彩色もなく素朴な法衣を着し蓮台に乗って合掌しており、御影札は二尊の風貌をよく写している。なお地藏堂では毎年旧暦七月二十三日に供養儀が執行されている。この日は二尊が開帳され、地藏堂脇では篁と阿古那の悲

恋が詠み込まれた歌に合わせて二十三夜盆踊りが行われる。供養儀の様子からは、腮無地蔵が現在においても無病息災、息災延命、難病平癒、所願成就といった靈験あらたかな地蔵尊として信仰されている様子が伺える。

篁が彫像したと伝える腮無地蔵は今も隠岐に祀られているが、廃仏毀釈の折に隠岐を逃れたとする所伝がある。大阪府豊中市南桜塚の曹洞宗東光院萩の寺、また兵庫県加古郡播磨町の曹洞宗大澤山善福寺はともに一体の腮無地蔵を祀っている。東光院所蔵の伴桂寺聯山祖芳筆『あごなし地蔵尊伝来本縁起』（明治五年五月）は「阿古那し地蔵尊」と記し、「篁の世話をしていた阿古という農夫が齒の病に苦しんでいたため、篁が世話になった礼として地蔵菩薩を二体刻み与えた。篁は帰京の際に自分の形見として地蔵菩薩をもう一体彫像した。三体の地蔵は阿古によって上東村（現、西郷町上西）の伴桂寺（廃寺）に祀られたが、廃仏毀釈の折りに、一体を隠岐に残し、二体を東光院と善福寺に一体ずつ遷座した」と伝えている。

東光院萩の寺は腮無地蔵大菩薩三尊像として、左右に掌善・掌悪の二童子を安置している。腮無地蔵の光背・台座は金色、向かって右側の童子は白色、左側の童子は赤色と全体的に鮮やかな色合いだが、腮無地蔵本体は隠岐の腮無地蔵と同様に素朴な出で立ちである。毎月二十四日が縁日で、八月二十三・二十四日にはあごなし地蔵尊延命祭として大法会が勤修され、



腮無地蔵尊 腮無地蔵堂  
畳敷二間続きの地蔵堂の最奥に安置された小祠に腮無地蔵は祀られている。小祠周囲の照明は暗く、手前に供養儀の祭壇もあって尊容拝見は難儀である。

五十年に一度開帳される。齒痛平癒の靈験によって全国的に信仰を集めるほか、水子供養・子授・子安・良縁招来・家内安全の御利益があるとされる。大澤山善福寺の腮無地蔵は黒ずんでいるが丁寧な彫り込まれたものである。善福寺には腮無地蔵のいわれを記した古文書と、隠岐伴桂寺の最後の住職祖芳大和尚に宛てた誓約書の控（明治五年八月七日付）が残されている。古文書には『あごなし地蔵尊伝来本縁起』と同様に篁の身の回りの世話をした阿古が登場し、篁が彫像した地蔵像に祈願することによって阿古の齒痛が平癒する。東光院と善福寺の腮無地蔵がともに隠岐から遷座されたという所伝は確かなようである。

「腮無地蔵略縁起」『あごなし地蔵尊伝来本縁起』はじめ、小野篁と腮無地蔵には種々の伝承が存在するが、隠岐では、腮無地蔵は篁と阿古那の恋物語によって彫刻されたものと信じられているようである。その背景には、配流地から帰京する貴族と村一番の美女の悲恋という、他の由来と比べて物語性が強く人々の印象に残りやすいことが関係しているのだろう。

腮無地蔵は小野篁が彫像した尊像以外にも複数存在する。たとえば愛媛県今治市本町の曹洞宗蓬萊山大仙寺は、隠岐に滞在していた篁の齒痛を治したと伝わる腮無地蔵を勧請して祀っており、愛知県知多郡南知多町の西山浄土宗臨海山慈光寺と鳥取県米子市河崎のあごなし地蔵堂の腮無地蔵も



(上) 腮無地蔵大菩薩三尊像 東光院萩の寺  
(下) あごなし地蔵尊 大澤山善福寺





隠岐の腮無地蔵から分身を請うたものと伝わる。このほか埼玉県川越市喜多町の曹洞宗青鷹山慈眼院広濟寺、福岡県北九州市門司区の真言宗醍醐派大原山不動院、三重県度会郡大紀町のおごなし地蔵堂、大阪府八尾市久宝寺のおごなし地蔵堂などでも祀られている。

前述した寺院の多くは曹洞宗である。現在は廃寺になっている伴桂寺も最後の住職であった祖芳大和尚が東光院の住職大雄義寧禅師の弟子であったことから曹洞宗であったと判断される。『おごなし地蔵尊伝来本縁起』には「阿古那し地蔵尊」とあり、「腮無地蔵略縁起」における篁の恋人「阿古那」の字が当てられているが、歯痛の治癒という腮無地蔵の御利益を受ける人物として登場するのは篁の世話人であった阿古である。曹洞宗の寺院が腮無地蔵の由来を流布するにあたり、篁と阿古那の恋物語ではなく、篁から阿古への報恩を取り上げたのは、報恩という仏教的要素を強めることで、腮無地蔵の靈験を高めようとしたのではないだろうか。

また、腮無地蔵を隠岐から勧請したと伝える寺院のうち、大仙寺は嘉永元年（一八四八）に今治藩士の深見利兵衛によって、慈光寺は嘉永年間に内田家によって現在の地に安置されている。深見氏・内田氏には海運業関係者という共通点があり、慈光寺境内の案内板に「北前交易の途中、風待ちのため隠岐に滞在」と書かれているように、江戸時代から明治時代にかけて盛んであった北前船は鳥取県境港を経由するため、隠岐周辺の海路は充実していた。隠岐から勧請された腮無地蔵の無病息災、難病平癒といった靈験が当地に広がることで、その靈験は全国各地に広まり、多数の腮無地蔵が彫像され信仰の対象となった。寺院だけではなく、辻々の小堂にも腮無地蔵が安置されるようになったのは、海路の発展にともない財を得た民衆有志によって比較的容易に勧請できるようになったためと考えられる。腮無地蔵はその名の通り、「おごがない」尊像が複数存在する。これは腮無地蔵の靈験を得て歯痛を治すために参拝者が腮無地蔵の「おご」を擦った、もしくは削ったためである。「腮」は「頤」の俗字で「サイ」とも読み、「おご」「おとがひ」の意味をもつ。なお腮無地蔵の「おごなし」は「あこ直し」が訛って「おごなし」となったとする説もある。また善福寺が配布している小冊子によれば、「おごなし」には「わが子が愛らしく、

いとおしい」という意味もあるという。現在では「おごなし地蔵」と表記するのが一般的であり、由来に「阿古那」「阿古」の名が登場しない尊像もあることから、篁と腮無地蔵の関係は隠岐の腮無地蔵堂、東光院萩の寺、大澤山善福寺以外ではあまり語られていないようである。とすると、烈しい歯痛に苦しむ人々にとって由来譚は重要ではなかったようにも思われるが、しかし近在の腮無地蔵の靈験は、隠岐で初めて腮無地蔵を彫像した小野篁の靈的な力の存在によるものだと誰もが暗に認めていたはずであり、腮無地蔵は篁に由来する云々は言わずもがなのことであったと思われる。

（岡本夏奈）

#### 【注】

- 1 西郷町誌編さん委員会編『西郷町誌下巻』（一九七六年 西郷町役場）、『角川日本地名大辞典・三一 島根県』（一九七九年七月 角川書店）による。隠岐の島町教育委員会生涯学習課文化振興係の岩崎ことい氏にご協力いただいた。厚く御礼申し上げる。
- 2 島根県教育委員会編『隠岐島の民俗―隠岐島民俗資料緊急調査報告―』（一九七三年三月）による。大島暁雄氏・松崎憲三氏他編『日本民俗調査報告書集成 中国の民俗 島根県編』（一九九七年十月 三一書房）に収録されている。
- 3 横山彌四郎氏・島根県隠岐島知夫村『隠岐の流人』（一九五三年二月 島根県）、野津龍氏『隠岐島の伝説』（一九七七年七月 鳥取大学教育学部国文学第二研究所）などに記載がある。
- 4 昭和三十一年（一九五六）八月二十八日（旧七月二十三日）腮無地蔵奉賛会筆。腮無地蔵堂内に掲げられている。
- 5 村山廣甫氏編『仏日山東光院 萩の寺』（二〇〇〇年五月 東光院萩の寺）。
- 6 宮柳靖氏「播磨ヒストリア」『広報はりま』二〇一一年九月号、二〇一一年九月、播磨町役場。

木版黒摺 四二・〇×一九・七cm 江戸時代末期

(宮島コレクション蔵)

。一遍上人御鏡之聖像

相別 無量光寺



その顔は、長く太い眉の下にすどい眼光をたたえ、念仏の声を称える口元はやや開かれて前歯が覗く。胸の前で合掌された手には念仏札を差し挟み、素足の左足を一步踏み出す。これは、熊野権現の教勅を得て、「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」と記された念仏札を配り（これを賦算という）、全国を遊行して念仏勧進を行った一遍の生涯を象る真影である。それが「御鏡之聖像」と呼ばれているのは何故だろうか。また、その足許に一つ置かれる蓮台は、何を意味するのか。<sup>1)</sup>

「相州無量光寺」とは、一遍（一二三九―一八九）の跡を受け継ぎ遊行上人となった他阿弥陀仏真教（一二三七―一三二九）を開基とする、当麻山無量光寺（現、神奈川県相模原市）である。他阿真教は時衆教団を創始しその発展に尽くした人物で、遊行上人としてのつとめを三代智得に譲って、当麻の地に隱遁・独住する。その前年に、他阿がこの地で歳末別時念仏を営む姿

が、『遊行上人縁起絵』（以下『縁起絵』）に描かれている。<sup>3)</sup> しかも、宗祖一遍の行状とともに二祖他阿真教の事蹟を全十巻にあらわす絵巻の中で、それは最終巻の最終段に位置する。その場面は当麻道場にとって、宗祖一遍の念仏が他阿上人を介して確かに受け継がれているという正統性を別時念仏という儀礼において示すという点で、重要な意味を持つ一段であった。その伝統に則り、当麻では歴代の住職が他阿上人を名のり、別時念仏を営み、賦算を行ったのである。

この当麻道場に祀られたのが、「一遍上人御鏡之聖像」と号する御影札に描かれた一遍上人像である。現在、本堂の仏壇中央厨子に本尊として安置されているその像は、一遍の等身大と目され、現存最古の彫像として知られている。後世の塗り直しによる影響で造立当時の趣とは異なるものの、徹底した写実性をもって生前の賦算する祖師一遍の姿を具象化し、迫力に満ちている。<sup>4)</sup> それは、かつて一遍の十三回忌に墳墓の地である兵庫観音堂を訪れた他阿が、安置された御影像をみて、「平素の姿にたがはねば、在世のむかし思出られて」懐旧の涙をとめることができなかつたと語る（『縁起絵』巻第十一段）<sup>5)</sup> 像容そのものでもあった。そこにおいて他阿と向き合う一遍の像は、合掌する手に念仏札を差し挟み、他阿、さらにはその後ろに控えた時衆の徒に、生前と変わること無く念仏を勧める姿で描かれている。当麻の地でも、御影札が描く通り、上人像は合掌する手に念仏札を持ち、賦算遊行の姿を現していた。その真影を兵庫観音堂と同じく御影堂に祀り、墳墓を築いて、当麻の道場は宗祖の念仏を当代の他阿上人から授かることのできる、時衆の根本道場としてのかたちを整えたのである。

そうした歴史を背景に、当麻の一遍上人像の由来として中世から近世を通じて近代に至るまで広く語り継がれた惹句が、上人の直作の「御鏡之靈（聖）像」である。それは、この地にやってきた一遍が、弟子たちに請われて自分の姿を鏡に映し、自ら描いた絵姿をもとに造られた霊像である、という縁起に因む。その由緒は江戸時代の初めにはすでに定着しており、元禄四年（一六九一）に編まれた『麻山集』<sup>6)</sup>には、「元祖上人真影之事」と

して、この像は一遍が弘安四年（二二八二）に当麻でしばしの休みをとったときに、智得上人（三代遊行上人）と関山入道らが力をあわせ彫像したものであること、また上人自らが開眼を行い、林のなかに安置したことなどが記されている。

霊像をめぐる縁起が主張する眼目は、当麻の地は宗祖一遍の遺跡であり、一遍により開かれたとする『歴史』である。境内にある宝暦十二年（一七六二）銘の碑に、「宗巨元祖当山開山一遍上人日域最初鏡之霊像」とあるように、無量光寺は御鏡の霊像を祀る地として霊場化する。その様相は、天保十二年（一八四二）に編まれた『新編相模国風土記』からもうかがえる。そこには、「当麻山金光院」とも呼ばれる無量光寺が一遍「初開の地」であること、一遍はこの地に三度訪れており、三度目の弘安四年に、時衆の願いをうけて、自ら鏡を取って頭面を照らし見て影像を写したこと、このとき二祖真教と三祖智得が関山民部らと力をあわせ画図を模して像を造ったこと、頭は上人自らがつくり「直作」の像と呼ばれたこと、また上人自らが開眼を行ったこと、ゆえに当山は「鏡の御影の霊場」と呼ばれたことなどが記されている。そうした由緒を備えて、御鏡の霊像は多くの参詣者を当麻の地に呼び寄せたことだろう。

その人気は衰えることなく、幕末から近代にかけて『開山遊行元祖一遍上人御鏡霊像縁起』が版に刷られ、広く頒布されている。表紙には、「日域遊行根地相州当麻／開山遊行元祖一遍上人御鏡霊像縁起／大本山／無量光寺」と記され、「当宗初開の霊地、遊行根本の古道場」である無量光寺が六百年の今に至るまでその伝燈が輝き続けているのもこの霊像の威信力によるものであり、ひとたび参詣し懇ろに祈ればたちまちに霊験を蒙ることができると説く。末尾には「亀形峯途程之略図」（後掲）として、東海道や甲州街道から、「当麻大本山」へ参詣するための行程が、大山や江の島・鎌倉などの名所をふくめて案内図としてあらわされており、いかに多くの参詣者が、霊像の霊験を求めて訪れていたかが知られる。そうした参詣者たちの求めに応じて、「一遍上人御鏡之聖像」は縁起とともに頒布されていたのである。

あらためてその図様をみると、謎めいているのは、御鏡の霊像の足許

に置かれた大きな蓮台である。それは本来、「南無阿弥陀仏」の六字名号本尊が戴かれるべき蓮台であった。賦算遊行のすがたを象る一遍上人像が南無阿弥陀仏の六字名号とともにあらわされる複合図像は、鎌倉時代以来繰り返して作られており、その遺品が各地に残っている。『縁起絵』には、因幡堂に参詣し賦算を行う一遍のもとに名号を求める人の姿が見え（巻第三第四段）、賦算と名号の施与は遊行上人の重要な勤めであったことが確かめられる。それらの伝統に根ざして、御影札には歴代の他阿上人の自筆による南無阿弥陀仏の六字名号がしたためられ、あるいは版にあらわされて施与されていたと推測される。御鏡の霊像と歴代上人の名号が組み合わされるとき、霊像がその口から称え、念仏札をもって勧める「南無阿弥陀仏」の念仏が、他阿上人の筆を介して六字名号本尊となって具現する。それはまさしく、霊像を祀る無量光寺と、歴代の他阿上人の担った宗教的役割が凝縮された一枚であった。御影札を戴く人々は、これを念仏の講の場の本尊としてかけたり、家の仏壇にかけて日々の念仏勤行に励み、先祖供養や家内安全の守りとしていたのではないか。

ところが、冒頭の御影札は、本尊となる六字名号を省略し、蓮台を残しながらもそれが書かれるべきスペースに「御鏡之聖像」という表題と無量光寺の名をあらたに刻んで頒布されており、興味深い。それはおそらく、御鏡の霊像の人気の広がり、その御影を求める人々の要望に応えた無量光寺側の変化に基づくもので、御鏡の霊像の効験に期待する人々に、痲瘡などの病い除けや安産、雨乞いや豊作などの護符として、御影札が広く頒布されるようになった結果と思われる。「一遍上人御鏡之聖像」の御影札は、時衆の根本道場としての由緒を誇る無量光寺が、一方で広く民衆文化に根ざしていく運動の上に位置付けられるものであった。

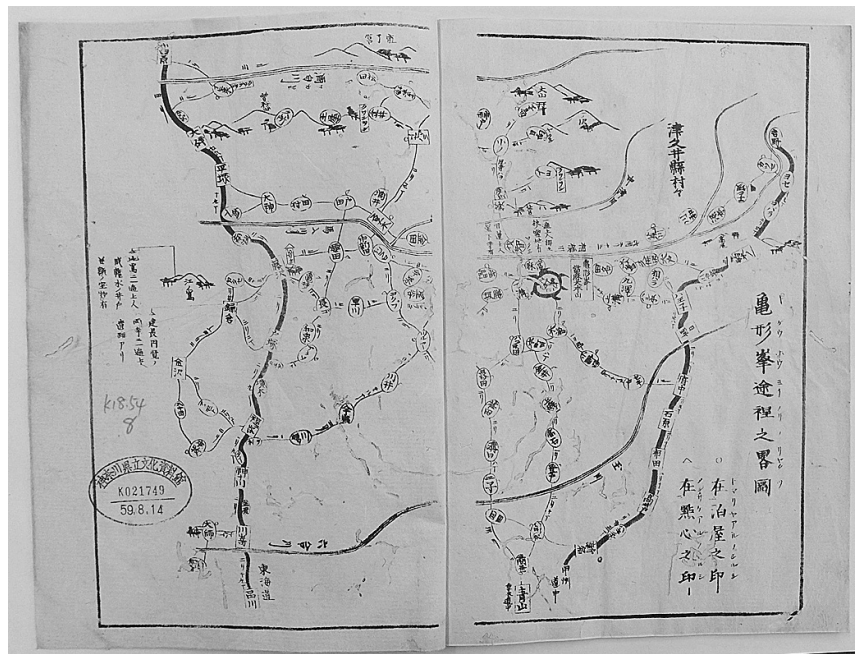
（阿部美香）

#### 【注】

- 1 神奈川県立図書館かながわ資料室に同じ御影札があり、金井清光（「新発見の一遍版画像二種」『一遍の宗教とその変容』岩田書院、二〇〇〇年）により紹介されている。

- 2 研究書として、座間美都治『当麻山の歴史』当麻山無量光寺、一九七四年、小野澤眞『時宗当麻派七〇〇年の光芒』日本史史料研究会企画部、二〇一五年がある。
- 3 無量光寺も『遊行上人縁起絵』を所蔵していたが、安永二年（一七七三）に焼失してしまった。小野澤眞「かつて存在した神奈川県相模原市無量光寺本『遊行上人縁起絵』」『金沢文庫研究』三三七、二〇一一年。
- 4 「相模原市当麻無量光寺蔵一遍上人立像」『神奈川県文化財調査報告』二五、一九五九年。山田泰弘「時宗の肖像彫刻」『仏教芸術』九六、一九七四年。特別展図録『遊行の美術』神奈川県立博物館、一九八五年。
- 5 特別展図録『重要文化財 光明寺本遊行上人絵』最上義光歴史館、二〇一三年。
- 6 時宗宗典編纂委員会編『定本時宗宗典』一九七九年所収。
- 7 無量光寺にはこのときの自画像と伝える絵像の鏡の御影も存する。山田泰弘「二遍上人画像の資料集成（二）」『時宗教学年報』十七、一九八九年。
- 8 神奈川県立図書館所蔵本による。『神奈川県史料編8近世（5下）』（一九七四年）には茅ヶ崎市高田の水越梅二氏所蔵本に基づく翻刻がある。また無量光寺には「開山遊行一遍上人鏡の寿像御縁起」の内題をもつ『開山遊行元祖一遍上人御鏡霊像縁起』の慶応二年（一八六六）の写本が存するほか、一九八一年に静岡県御殿場の旧家から寄贈された護符類一式のなかに、『開山遊行元祖一遍上人御鏡霊像縁起』や「一遍上人御鏡之聖像」の御札が収められている。小野澤眞「相模原市南区・当麻山無量光寺調査詳報」『相模原市史ノート』一一、二〇一四年。
- 9 金井清光「時衆研究の新資料について」『時衆教団の地方展開』東京美術、一九八三年。有賀祥隆「時宗の祖師画像について」『仏教芸術』一八五、一九八九年。

（本研究はJSPS科研費15K0225の助成を受けたものである。）



上: 亀形峯途程之略図（『開山遊行元祖一遍上人御鏡霊像縁起』  
神奈川県立図書館所蔵）  
右: 亀形峯当麻大本山（無量光寺）部分



（せきぐち しずお 歴史文化学科）  
（おかもと かな 大学院生活機構研究科生活文化研究専攻二年）  
（あべ みか 歴史文化学科）